

二〇二二年度  
晃華学園中学校

第一回  
入学試験問題

【国語】

時間…五〇分  
配点…一〇〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。



問題は次のページから始まります。

一 小学五年生の輝は、父を亡くし、母と二人で暮らしていた。毎朝、ベランダで見送る母と手を振り合うのが日課だったが、ある日それをクラスメイトに見られて、クラス中でからかわれることになってしまふ。同じく父親を亡くしている香帆だけが「おかしくない」と言ってくれ、それをきっかけに二人は仲良くなるが、香帆は六年生を目前に転校してしまった。以下はそれに続く部分です。

二人でベンチに腰かけて、おじいちゃんに話しはじめた。

学校でからかわれたこと。①お母さんにやめたいと言えずに悩んでいることを打ち明けた。おじいちゃんはあごに手をあてて考えこんだ。おじいちゃんの手は土でよごれていて、指先は茶色くそまつている。

「輝はあまえん坊だったからなあ。千明さんも、大変だっただろうなあ」  
ぼくは顔を赤くした。

自分でも、それはわかっている。

千明さんというのは、お母さんのことだ。お母さんのことを下の名前で呼ばれるのは、とたんに変な感じがする。

「おれは、やめなくてもいいと思うな」

おじいちゃんが言った。

「いいじゃないか。ぜんぜん、おかしくなんかないぞ。まわりの言葉や」  
I を気にして、好きなことをやめる必要はないんだ。

輝とお母さんの、大事な時間だろう」

「うん」

②ぼくはあいまいにうなずいた。

香帆も、同じように言ってくれたんだ。

「他人のいじわるな言葉になんか、耳をかたむけなくてもいいんだ。なっ、輝」

「うん」

うつむいたぼくの顔を、おじいちゃんはそつとのぞきこむ。

ぼくは、自分の気持ちをどう言い表したらいいのかわからなくて、頭の中で必死に言葉を探した。

他人の言葉は気にしなくていいと、おじいちゃんと言う。そのとおりだとぼくも思う。

「だけど、違うんだ。たしかに、きつかけはみんなにからかわれたことだったかもしれない。みんなに笑われて、はずかしい思いをした。だけど。」

「そうじゃないんだ。まわりに言われたからじゃないんだ。ぼくは自分の意志いしで、やめたいんだ」  
「そうだ。これはぼくの意志なんだ。ほかのだれでもない、ぼく自身の。」

「みんなに笑われたのはショックだったよ。でもなんていうか、ぼく自身がこういうのはおかしいんじゃないかって、思うようになったんだ。おかしいっていうのとは、違うかもしれない。その、なんていうか。いやだとか、はずかしいとかじゃなくて、今のぼくには、なんか違うっていうか」

「サイズの合わない服を着ていて、気持ちよく体を動かさないような違和感いわかん。なんだろう、この気持ち。自分でもよくわからなくて、もやもやするんだ。」

「でもさ、お母さんを傷きずつけたらどうしようって、心配なんだよね」  
「だって朝の見送りは、ぼくたちの大事な時間だから。」

「でも、やめる」

「ぼくが言いきると、おじいちゃんは③おもむろに立ちあがった。腕うでを組みながら、塀へいの向むかうの桜さくらの木を見あげる。長くのびた枝が敷地しきちにかかり、毎年桜の花をながめることができるのだ。」

枝のところどころには、ぶくつとふくらんだつぼみがならんでいる。④薄紅色うすべにいろのつぼみは、春をとじこめたまま開く日をじっと待っている。

「なつかしいなあ」

「おじいちゃんが見みとつぶやいた。」

「おじいちゃんの視線しせんの先を追うと、⑤その目は桜の枝のずっと向こう。うすい雲がとけた空を見ている。」

「おじいちゃん、なにがなつかしいの？」

「ん、ああ、すまん」

「おじいちゃんはてれたように笑った。」

「渉わたるのことを、思い出したんだよ」

涉。お父さんの名前だ。

「えっ、なんでなんで？ どうしてお父さんのこと思い出すの？」

ぼくは興奮して、おじいちゃんのそでを引いた。お父さんの話を聞くととき、ぼくはいつも気持ちが高ぶってしまうんだ。

「あのときの涉も、今の輝と同じくらいの年だったな」

おじいちゃんは再びベンチに腰をおろすと、お父さんの思い出話をしてくれた。

それは、体操着袋にまつわる話だった。

お父さんが小学生のころ、体操着袋はお母さん、つまりぼくのおばあちゃんが手づくりでつくっていた。

お裁縫が得意なおばあちゃんは、学期が変わるたびに、お父さんの体操着袋をつくるのを、楽しみにしていたのだという。

「W A T A R U」と、アプリケをつけたりパッチワークにしたり、ずいぶん  
II のこんだものをつくっていた。

「もう手づくりしない方がいいよ。自分で選んだのを買ってくるから」

そう言っ、お父さんは紺色の無地の袋を、自分のおこづかいで買ってきてしまった。

「おばあちゃん、シヨック受けてた？」

「ああ、さみしそうにしてた」

そうだよな。

息子のためにやっていたことを、突然、もういいって言われたんだもん。

ぼくのお母さんは仕事でいそがしい不器用だから、手づくりでなにかをつくってくれたことはない。ぼくは手づくりの体操着袋をうらやましく思った。

でも、お父さんはお父さんで、なにか思うところがあつたんだろう。ぼくみたいに、クラスメイトにからかわれたのかもしれない。

それとも、アプリケのついた袋になにか違和感があつたのだろうか。

ただ反抗したかっただけ、ということも考えられる。

お父さんに聞いてみたい。

心の底からそう思った。

お父さんなら、今のぼくの気持ちもわかってくれるんじゃないだろうか。

「あのときの渉は、X」

おじいちゃんはやさしく笑い、その目にしつかり映しこむようにぼくを見た。なつかしい人を見つけたみたい、目を細める。

おじいちゃんは、ぼくを見ながらぼくの中にお父さんを見ている。それがわかって、うれしいような、むずがゆいような気持ちになった。

「それに、渉はこんなことも言ってたんだ」

「なんて言ったの？」  
胸がふるえる。

「お母さんには悪いけど、大人になるんだ」ってな」

おじいちゃんの言葉が、午後の光の中にとけていく。

「どうだ、生意気なこと言うだろう？」

おじいちゃんはどうれしそうに笑った。

うん、ほんとに生意気だと思った。

だって、ぼくたちはまだ小学生で、大人がいなくてなにができるだろう。

それでも、大人になる。

ぼくは大人になるんだ。

終業式の日がやってきた。

明日からはじまる春休みに、ぼくの心はすでに浮き立っている。

お父さん、いつてきます。

お鈴を鳴らして、手を合わせる。

写真のお父さんへそっと目配せをして、「よしっ」と気合を入れて立ちあがった。

台所のお母さんのほうへ向かう。

「お母さん」

「なに？」

流して手を洗あらいながら、お母さんが顔をあげる。

「あのさ。いつもベランダで見送おくってくれるじゃん。今日で最後にしようと思うんだ」

ぼくは昨日から決めていた言葉を言う。

「ぼくさ、四月からは六年生だし、お母さんだって朝はいそがしいだろ。毎朝見送おくってもらえてうれしかったけど、今日でおしまにする」

お母さんはきゅつと、蛇口じやぐちの水をとめた。

「そつ、わかったわ。今日でおしまいね」

あっさりとした口調だ。

「ほら、もう出る時間だよ」

そう言ってぼくをせかす。

ぼくは⑥拍子ひょうしぬけしてお母さんの顔を見つめた。

てつきり、なんで？ とか聞かれると思って、いくつも言葉を用意していたのに。

お母さんが傷きずついたらどうしようって心配していたけど、お母さんの顔はなんていうか、  
⑦とても晴れ晴れとしている。

今日でおしまい。

自分で言った言葉を心の中でくり返してみる。

さみしく思っているのは、どうやらぼくのほうみたいだ。

「ほら、いったいいった」

お母さんに手で追いはらわれる。

「いってらっしゃい」



「うん……、いってきます」

ドアを開けると、鼻先に風がふれた。つんとさすような冬の風ではなく、やさしく鼻の上をすべっていく春の風だ。

(葉山エミ『ペランダに手をふって』)

問一 —— 線部①「お母さんにやめたいと言えずに」とありますが、これはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 人からどう思われるかを気にして好きなことをやめるのはおかしいと感じているから

イ 自分がクラスでからかわれていたことをお母さんに打ち明けたくないから

ウ クラスメイトにからかわれるのはつらいが、それに負けてしまうのもいやだから

エ 朝の見送りという大切な時間をやめると言って、お母さんを悲しませたくないから

問二 —— 

I
---

、

II
----

 に当てはまる言葉は何ですか。次のア～オの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 顔      イ 手      ウ 口      エ 目      オ 足

問三 —— 線部②「ぼくはうなずいた」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア おじいちゃんの言うことはわかるが、ぼくの気持ちとどこか合わないような気がしている

イ おじいちゃんは何でもお母さんの味方ばかりして、どうにも納得できないと感じている

ウ おじいちゃんの言うことは難しく理解できなかったが、わかったふりしておこうと考えている

エ おじいちゃんと香帆が同じ事を言ったので、ぼくが間違っているのではないかと不安になっている

問四 —— 線部③「おもむろに」、⑥「拍子ぬけして」の意味は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

③「おもむろに」

ア	きつぱりと
イ	すつきりと
ウ	ゆつくりと
エ	しつかりと

⑥「拍子ぬけして」

ア	何も考えずに
イ	助けを求めて
ウ	緊張がゆるんで
エ	都合が悪くなつて

問五 —— 線部④「薄紅色のく待っている」とありますが、この表現はどのような効果を与えていると考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 季節の変化を表すことで、おじいちゃんと話し出してから長い時間が経っていることを感じさせる

イ 花がまだ咲いていない様子は、輝の心が閉ざされたままであることを示している

ウ 春が間近であることを表して、まもなく明るい変化が起こりそうなことを予感させる

エ つぼみが春をとりこめているという言い方によって、美しい花が咲くと確信させる

問六 —— 線部⑤「その目はく向こう」とありますが、この時のおじいちゃんの様子はどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 美しい桜が咲くのを想像し、待ち遠しく思っている

イ 今はもういない自分の息子の、子どもの頃を思い出している

ウ 曇り空を見て、この後天気はどうなるのかを心配している

エ なかなか自分の言うことを聞かない孫に困り果てている

問七 X に当てはまるものとして最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 輝と違ってまだ子どもだったのだろうね

イ おばあちゃんの楽しみだったとは気づかなかったのかもしれないな

ウ おばあちゃんに反抗しなかったただけだろうね

エ 輝と同じ気持ちだったのかもしれないな

問八 ――線部⑦「とても晴れ晴れとしている」について、晃子さんと華子さんが話しています。A C には本文中か

ら当てはまる言葉をそれぞれ抜き出して書きなさい。それを踏まえて D には適当と考えられる内容を書きなさい。ただし、それぞれの [ ] に指定されている字数で答えること。

晃子 「どうしてお母さんは『晴れ晴れとしている』のかしら。」

華子 「忙しい朝の仕事が一つ減ったから、楽になったと感じているのじゃないかしら。『ほら、いったいった』なんてまるで早く出ていけと追い出すようだし、面倒だったのかもしれないわ。」

晃子 「それって本当かしら。お母さんはどんなふうに感じていたのか考えてみましょう。」

華子 「そうね。輝は自分が A 五字以内 のに必要なことだと感じて見送ってもらうのをやめようとしたはずよ。」

晃子 「輝の B 五字以内 も子どもの頃に同じようなことを思ったのよね。」

華子 「その話を聞いたおじいちゃんはどう思ったのかしら。」

晃子 「おじいちゃんは『生意気なこと言う』と言いなながらも C 十字以内 、と書いてあるわ。」

華子 「私、お母さんが晴れ晴れとしていた理由がわかったわ。 D 二十五字以内 だわ。」

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「先生、この妙な部品は何ですかー?」

「やばいです、先生。ここを触ると火花がでます」

大学の授業の中で、年に一回行う題目がある。それは、『分解ワークシヨップ』と呼ばれるものである。

身近な電気器具を分解し、その機能がどう実現されているかを探求するのである。現代の電気器具は単純なものであっても、複数の技術が重層的に入り込み、それらを理解するには、かなりの基礎知識が必要となる。しかし、基本的にモノを分解するのは大変面白く、その面白さに乗じて、それらの知識が自然と身につくのである。

今年のその授業が先週行われた。授業は、同僚のK教授と共に計画し、実施される。

分解するアイテムは、工学博士であるK教授を選ぶ。今回選ばれたのは、食パンを焼くトースターと、調理で使うハンドミキサーで

あった。

トースターは、そもそもどうやって食パンを焼いているのか、何故ポンと飛び出せるのか、こんがりとした焦げ具合はどうして生まれるのか。ハンドミキサーの2つの羽はどうしてぶつからないのか、回転の速さを段階的に変えられるのは何故か、などなど疑問は尽きない。家の台所で見慣れたものも、教室で①新しい目を持って見つめると多くの不思議が見えてくる。私は、分解を始めんとする学生達を前に、まず言った。

「面白いからと言って、②やみくもに分解しないように。まず、この器具がどのようにその役割を果たしているか、想像しなさい。そして、解き明かしたい謎を見つけてください」

私とK教授は二手に分かれ、私はトースターの分解チームについた。そして、先ほど言ったことを実践させるために、朝購入したあのものをトートバッグの中から取り出した。

「トースターのふるまい、扱いを知るために、この食パンを焼いてみましょう」

学生達は、厚切りのイギリスパンに③色めきたった。中には、教室を抜け出し、研究室の冷蔵庫からジャムとバターを持ってきた強者もいた。

実際に、そのトースターを使って観察してみると、いろいろなことが分かった。食パンをスロットに差し込み、脇の大きいレバーをグッと押すと食パンが下がっていく。

それと同時にパンはそのスロットの中で、両面を両脇から粗い金網のようなもので軽く押さえられた。これは初めて知った機構である。④一体何のために？ 脇のレバーのそばにボタンがいくつもあり、焼き上がりのこんがり度が選べるようになっていた。これもどういう仕組みなのか？

そのうち、ポンという音がして、パンが飛び出してきた。香ばしい匂いが教室に充満し、トースターチームは思わぬ朝食にありつけることになった。

「表面はこんがり焼けてサクツとしているのに、中はしっとりしておいしい」という声が聞こえた。みんなの家には、こんな形のトースターはないの？ と尋ねると、そのチーム5名全員とも「ない」とのことだった。どの家もオーブントースターでパンを焼いていた。「先生の家にはトースターあるんですか？」と、遠慮のない質問が飛んできた。

「もちろんありますよ。やはり食パンはこのトースターの方がおいしいです」と答えると、トーストを頬張ったままの声で「たしかに」

「たしかに」と賛同を受けた。

「では、<sup>⑤</sup>トースターのふるまいを確認したので、冷めたら分解に入りましょう」

しかし、パンを数枚焼いたトースターはかなり熱い。中を分解できる温度になるには、もう少しかかりそうである。時間が惜しい私は、アドリブでこう話し出した。

「冷めるまでの時間を利用して、トースターのことをあれこれ考えてみませんか」

一体、トースターの何について考えるのかと言わんばかりに、みんなが私を見返した。

「そもそも、なぜ表面がきれいにカリッと焼けて、中はしっとりしておいしいのでしょうか」

私は、そんな根源的な質問を投げかけた。みんな黙ってしまった。おいしさだけは享受したくせに、そのおいしさを担保してくれている技術に関しては考えようとしなかったのだ。

私は、仮説はこう立てるのだということを示すように、次のように話した。

「表面が一樣にカリッと焼けるということは、パンの表面のすぐ近くに平面状にヒーターがあるからではないでしょうか」

「———そうか、Iから、まだ中はしっとりなんだ」

学生の一人がつぶやいた。

「そうですね。これがヒーターが少しでも遠くにあると、表面が焼けるのに少々時間がかかり、その間に中のしっとり感も失われてしまうんですね。私はさらに続けた。

「先ほど観察した食パンを両脇から押さえる機構は、ヒーターとパンとの距離を、両面とも均等にする機構だと思います。うちにあるトースターはそれがないので、パンが斜めに入ったりして焼き方にムラが出来てしまうんです」

なるほど、という小さな声があちこちから聞こえた。次に私は、意地悪く、こんな質問をした。

「熱の伝わり方には3種類ありましたよね。中学の理科で習ったはずですよ。では、このトースターでは、その中のどんな伝わり方をしているのでしょうか」

トースター分解チームは下を向いてしまった。中学の理科は義務的に接していたのである。でも今のタイミングには、おいしいトーストという義務とはかけ離れた味方がいて、<sup>⑥</sup>教育には最適な状況である。私は答えを言った。

「伝導、対流、そして放射。これが熱の3つの伝わり方です。そしてトースターはその放射を使って食パンを焼いているのです。放射

とは英語では ラジオエーレン radiation、四方八方に発することです。ラジオなども放送局から電波を radiation するところから、そう呼ばれています。だから食パンがムラ無くきれいに焼けるんですね」

学生達は、このおいしさにちゃんと理があつた事が分かり、神妙な面持ちであつた。

⑦ 味を占めた私は、続けざまにこう質問した。

「A」

「B」

考えた事もないような口振りだつた。私はヒントを出した。

「C」

みんなじつと考え出した。

一人の学生が小さな声を發した。

「D」

「そうです、あのトーマス・エジソンです。エジソンは電球だけを發明したわけではありません。いろんなものを發明しました。みんなが映像史で習つたように、蓄音機ちくおんきもエジソン型の映写機も作っています。ただ、エジソンは誤解されがちですが、単なる發明家ではないのです」

トースターを前に思わぬ名前が出て、みんな興味津々きょうみしんしんな様子であつた。

「エジソンは、電気を使う社会を夢見たのです。電気を各家庭に送電し、その電力で生活する、そんな電化社会を構想したのです」  
暗い夜を電球で明るくし、朝、パンをトースターで焼く。そんな電気を抛り所よせどころにする社会をである。

私は続けた。

「エジソンは、さらに聞くとびつくりするものまで發明しました」

一同また黙つてしまった。

「それは、なんと朝食です」

「えっ、それまで朝ごはん、なかったんですか」

「実は、米国では当時、食事は昼と夜の二食でした。エジソンは電球だけでは

II

は来ないと思ひ、朝にトースターを使わせ

ようと、朝食が健康にいいと提唱したのです」

目の前のトースターに触れると、温度は分解を始められるくらいまで下がっていた。

「さあ、分解を始めましょう。自分の知りたいことが、どんな機構で具現化されているか、自分の目で確かめてください」

みんなは手に手にドライバーやラジオペンチを持ち、エジソンが発明してから105年目を迎える現代のトースターに挑みだした。

それから2時間ほどの間、一台のトースターは、学生に驚きを与え続け、多くの納得とそれ以上の疑問を残して、ばらばらに分解されたのであった。

(佐藤雅彦『考への整頓 ベンチの足』より「トースターは誰が発明したか」)

問一 —— 線部①「新しいく見えてくる」とありますが、これがどういうことであるかを説明した次の文章の a

b に当てはまる言葉は何ですか。本文中から a は二十字以内、b は十字以内で抜き出して書きなさい。

ただし、句読点は一字に数えます。

身近な電気器具が

a

を想像すると、

b

が見つかること。

問二 —— 線部②「やみくもに」、③「色めきたった」の意味は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記

号で答えなさい。

②「やみくもに」

ア 真剣に  
イ 独り占めして  
ウ 考えもせずに  
エ ふざけて

③「色めきたった」

ア 活気づいた  
イ がっかりした  
ウ とまどった  
エ 緊張した

問三 —— 線部④「一体何のために？」とありますが、筆者はどのような答えを出していますか。「ため」という言葉につながるよ

うに、本文中から二十五字以内で探し、最初と最後の五字ずつを書きなさい。

問四 —— 線部⑤「トースターのふるまい」とありますが、これはどのようなことですか。二十字以内で書きなさい。



問五 I に入る言葉は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア パンの内部も一様に焼ける  
イ 短時間に表面だけが焼ける  
ウ 表面をじっくり焼くことができる  
エ ヒーターがパンの表面に接触している

問六 —— 線部⑥「教育」とありますが、ここでの「教育」の説明として最も適当なものはどれですか。次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一緒に学び合える仲間を積極的に作ること  
イ 勉強は学生の義務であると意識すること  
ウ 楽しみながら学んで知識を身につけること  
エ 中学校の基礎に戻って知識を確認すること

問七 —— 線部⑦「味を占めた」とありますが、ここではどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 学生が今まで気付かなかったことにうまく気付いてくれたので、他にも新しい発見をしてもらいたい、と思ったこと  
イ 学生があまりにも科学に対して無知だったので、反省してもらうためにもう少しやりこめよう、と思ったこと

ウ パンをトースターで焼くとおいしいと学生がわかってくれたので、もっとトースターの魅力を紹介したい、と思ったこと  
エ 学生が話を面白半分聞いていたので、もう少し問いを出して学問にまじめに取り組んでもらおう、と思ったこと

問八 A ～ D について、それぞれに当てはまるセリフはどれですか。次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 身近なものであっても立派な発明です  
イ 誰もが絶対知っている人です  
ウ トースターって、誰が発明したか知っていますか？  
エ まさか、エジソン……？  
オ えっ、誰が発明したのですか？

問九 II に入る言葉は何ですか。本文中から五字以内で探して書きなさい。

三 次の①～⑥の —— 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① カン|チヨウ|により水位が下がる  
② サク|リヤク|を巡らす  
③ 神社|ブツ|カク|を訪れる  
④ 革をモ|ゾウ|した素材  
⑤ バン|コク|キ|を掲げる  
⑥ 舌がコ|えて|いる









